

# Yonago East Weekly



【平和という未来に希望を持ち、ロータリーの出会いを楽しみましょう】

- 創立/1968年4月24日 ● 事務所/米子市西福原1-1-55 スマイルホテル米子 Tel.(0859)32-5531
- 例会日/水曜日12:30~13:30 ● 例会場/A N A クラウンプラザホテル米子  
米子市久米町53-2 Tel.(0859)36-1111
- 会長/佐田山有史 ● 幹事/船田正一 ● 会報/松浪昭二

## 出席報告

会員数 105 名  
 出席数 70 名 欠席数 29名  
 出席免除会員 6名  
 荒川(雄)君 杉原(弘)君 新納君  
 宮本(守)君 高橋君 小谷君  
 出席率 72.12 %

結婚記念祝：1日 室 敦文 君 12日 永島正道 君  
 15日 杉原秀一郎君 16日 吉岡朋美 君  
 20日 深井基義 君 27日 赤木勇夫 君  
 27日 梅田整一 君

## ビジター

### メイクアップ

会員 10名 (1/23 鳥取大学医学部見学会)  
 会員 27名 (1/24 クラブ協議会)

スマイルBOX 34,000 円 (769,000 円)

本人誕生祝：杉原(秀)君、石部君  
 荒川(圭)君、森田君

創立記念日祝：荒川(圭)君

主・夫人誕生祝：尾沢(三)君、河上君、石井君  
 宮永君、木見君、石川君

結婚記念祝：牧田君、井上(雄)君、室君  
 永島(正)君、杉原(秀)君  
 吉岡君、赤木君

## 今週のお祝

### 主・夫人誕生祝：

2日 尾沢三夫 君 5日 河上定弘 君  
 14日 石井敬薫 君 19日 宮本寛雄 君  
 24日 宮永誠治 君 27日 木美俊彦 君  
 27日 石川貴啓 君 30日 野津一成 君

## 【会長挨拶】



鷺見雄司会員の丸京製菓(株)が食品衛生の向上に貢献し厚生労働大臣表彰を受賞されました。ロータリーの職業奉仕、職業を通じて社会に奉仕するという基本中の基本で表彰を受けたという大変喜ばしいこととございます。また、美保テクノグループの野津会員、今出会員の美勇会が能登半島の被災地支援のために日本赤十字社鳥取支部に現金1000万円を寄付されました。

さて、本日の講師の松本薫さんの「銀の橋を渡る」という本を2022年の6月ごろに読ませて頂きました。あっという間に読んでしまって、知人2人ほどに面白いぞって紹介をした経緯がございます。その一節に「特別な人生というものはありませんけれど、人生の特別な時はどんな人にもあるのではないのでしょうか。中海は月が美しいところでした。湖に映るとそこにはシルバーブリッジがあります。」ということで、松江から米子まで松本先生と遊覧をして、振り向いてシルバーブリッジを観察したこともございます。大変読みやすい本ですので、ぜひ皆さんご覧になって頂ければと思います。本日はありがとうございました。

## 《幹事報告》

- (1) 本日例会終了後、クラブ協議会開催
- (2) 下半期会費口座振替 … 2/13予定  
お振込みの方は2/29までをお願いします
- (3) 1/31付退会者 … 平井会員  
(ロイヤルホテル大山)
- (4) 他クラブ例会変更等  
ビジター受付 … 2/15・22(木) 米子中央RC  
2/19(金) 米子南RC  
2/20(火) 境港RC

## 【次回プログラム】

- 2/7 「ロータリーの友」紹介 … 雑誌委員会  
 「ロータリーの友」 … 小林慎一会員  
 2/14 「年男放談」



# 「新作『火口に立つ。』と生田長江」 作家 松本薫氏



小説を書き始めたのは30歳位からで、最初に本になったのは「梨の花は春の雪」です。この時もう40も後半だったので、物書きとしては非常に遅かったです。この「梨の花は春の雪」が映画化されたおかげで、その後いろんなところからお話を頂いて、今日まで鳥取県の人物や歴史を主なテーマとした本を出すことができました。

今年2月3日に発刊します「火口に立つ。」という本の発売直前にこういう機会を頂きましたので少し紹介させてください。生田長江という人は、1882年に生まれ、1936年に亡くなりました。日野町の貝原出身で単に文学者にとどまらない人でした。生田長江は東京帝国大学に進み哲学科を専攻し、卒業後は女学校の英語教師になります。この時すでにいろんなものを書いており、世間的にも認められつつありました。上田敏という人から「君は話す声が、とうとうと流れる長江のようだ」ということで、長江という号をもらったということです。長江は女学校で女性の文学会を作りました。明治の終わり頃、女性はなかなか文壇に認めてはもらえない。その中で一番世に出ていた人で与謝野晶子さんがいます。女性の文学者をもっと生み出さねばということで、平塚らいてうに勧めて「青踏」という女性雑誌を作らせます。女性だけが集まって作った雑誌で、世間の反響を呼び起こします。明治の終わり頃ですから女性は家、男性に縛られていたわけです。恋愛や結婚の自由もありませんし、耐えている女性がいっぱいいたわけですが、「青踏」の女性たちは非常にアグレッシブでして、不満もガンガン書いてあるわけです。それが世の中の女性の心を大きく動かします。一方で、バッシングもすごく、マスコミにも叩かれます。叩かれるがゆえにまた強くなるというところもあり、女性のフェミニズム運動の先駆けだと言われています。フェミニズムって何かと言いますと、男女は同権である、そして女性の権利を認めるという考え方です。長江は自分の仕事としては、ニーチェ、トルストイとかドストエスキーといった、ヨーロッパの作品をたくさん翻訳しています。また、社会にも非常に関心を持ち、大正デモクラシーの先駆けだった人だと思えます。そういう時代の中でカール・マルクスが書いた「資本論」の本訳を日本で誰が最初にやるかと注目の的だったようです。長江は、これは翻訳しなければと考えていましたが途中で中断しました。この中断にはある人物の妨害、誹謗中傷が絡んでおります。そこは小説の1つの山なのでぜひ読んでいただけたらと思います。その後、病気が悪化して鎌倉に引っ越します。病気はハンセン病です。ハンセン病というのはずいぶん長い間差別されてきた病気です。本の中ではかなりハンセン病のことも触れております。晩年は宗教の研究に向かい釈迦の一生を描く「創作釈尊」を第3部まで執筆しています。その他に戯曲ですとか小説も書いておりますし、戯曲の多くは舞台化されています。長江が当時課題にしたことは、今日もまだ解決されないまま引き継がれているものがたくさんあります。100年前は確かに昔ですけど、考えていることはそんなに今と変わらないかもしれないし、変わっているところもあるし、私たちが生きる現代の問題として長江が考えていたことを呼び戻せたらいいなと思っています。

最後になりますが、これは小説なので長江が主人公ではありません。主人公は若い女性です。この女性が長江のお手伝いになり、やがて自分も自立したい、自分の生き方は自分で決めたいと思い長江の家を出て、さあ、どうやって稼いでいくのか、何をしたらいいのだろうと、そういう一人の女性の生き方の物語としても読んでもらえたら嬉しいです。